

オプション教材ニシキギ 読解マラソン集



読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問でもいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。
作文用紙の余白などに書いても結構です）

4.

読解マラソン集5番「子どもというものは」を読んで次の問題に答えましょう。○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 大人になっても、解釈され理解される姿にならない子供がいる。 B 学校で、暗記や訓練が強制されると、かえってその結果のほとんどは忘れら

1 A O B O 2 A O B X 3 I A X B O 4 A X B

解答1: 1

答えの数字を入れたあと確認ボタン、決定ボタンを押します。

5.

読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）
<http://www.mori7.net/marason/ki.php>

読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）

読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）

読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）

読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）

読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）

読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）

恭一はドアの外にたたずんで、去年、一人で新幹線に乗ったときのことを思い出していた。恭一にとつて初めての経験だったが、じつはそのときも何度かトイレに通った。ジューズのせいでも水のせいでもなかった。

トイレから出てきた久子は、生真面目な表情で肩をすぼめていた。兄に苦情を言われないようにと気づかっているようすだった。

「手を洗えよな」

恭一は妹の細い肩を押すようにして、洗面コーナーへみちびいた。それから、

「おまえ、さつき泣いたらろ」

と、いきなり言った。

ホームまで送ってきた母が、窓の外で笑いながら手をふったときのことだ。窓ガラスに顔を押しつけるようにして、妹は肩をふるわせていた。それを、ふいに思い出したのだ。

「おまえ、手をふって泣いたんだろ」

久子は手を洗いながら、かたくなに黙りこくっていた。鏡に映っている顔が、また泣いているように見えた。

しまった、と恭一は思った。なんでこんなに、いじわるしちゃうのかな。

「おい、ハンカチあるのか」

急いでポケットを探った。しかし、すでに久子は自分のハンカチを出していた。

去年、一人で伯母さんの家へ行ったとき、東京に着くまでに、

恭一は何度も涙ぐんだ。ホームでの母との別れが悲しかった。このまま一生会えなくなるのではないか。そんなことを思うたびに、下唇がゆがんできたものだ。

きつと久子も、あのときの自分と同じ気持ちになっているのだろう、と恭一は思った。

座席に戻ってからは、優しく話しかけた。

「おい、眠ってもいいぞ。東京が近くなったら起こしてやるから」

「ううん、眠たくないもん」

久子は車窓の風景へ目を向けていた。こころなしが声がうるんでいる。

「ガムやろうか」

「ううん、いらない」

つむじを曲げたらしく、久子はよそそしい答え方をした。恭一は雑誌をひらいたが、妹のことが気になって、なかなか漫画のなかに入り込めなかった。

「このまえ、おれ一人で来たときな」

雑誌に目を落としたまま話した。

「隣に、ふとつたおばさんが坐つててさ。すごく大きいびきをかいて眠ってたんだ」

久子は耳を傾けているようすだった。恭一は、いびきの真似をして鼻を鳴らした。

「あんまりうるさいんで、こうやってさ、腕を突つてやってたんだ」

恭一は肘を使って久子の腕を小突いた。

「ツンツンって突くと、いびきがゴンゴンって鳴るんだ。ツンツンツンって突くと、ゴンゴンゴンだろ。面白くなっちゃってさ」

久子が、くすくす笑いだし、腕を小突かれるたびに身体を揺すつた。恭一も笑いながら、ますます大げさに作り話をつづけた。

「おい、ジューズ残つてんだろ」

さんざん笑ってから、恭一が言った。

「ぜんぶ飲んでいいんだぜ」

「……だつて」

とまどうように久子がつぶやいた。

「いいつてば、トイレに行ってもいいから。何度だつて、ついててやるよ」

漫画を読むふりをしながら、恭一は言った。

やがて列車がトンネルに入つて、窓ガラスに久子の嬉しそうな横顔が映った。（内海隆一郎「だれもが子供だったころ」）



兄ちゃんが初めてカメラを手にしたのは、小学校の三年生の誕生日のときだった。お祝いに買ってもらったおもちゃみたいなカメラだったが、とにかく写るものだから、おもしろがつて、さなえはばかり、たくさん撮ってくれた。さなえは、まだ幼くて、それだけにカメラの前でおどけたり、本気になって泣いたり怒ったり笑ったりしたから、ずいぶんおもしろい写真が撮れた。だから、その頃のさなえのアルバムはずいぶん厚い。

兄ちゃんは、その後何度かカメラを換えた。カメラが良くなるにつれて、さなえの方も大きくなって、昔ほどカメラの前で、無邪気になれなくなっていた。すると、兄ちゃんの方も気乗りしないのか、少しずつ、別のものを撮るようになっていった。さなえは、そんな自分のことも、兄ちゃんのこと、ちよつぱり寂しかった。

そしてある日、兄ちゃんは、たまたま裏山（といっても中央アルプスの山の一つなのだ）へ入ったとき撮ったモモンガの飛行写真がやみつきで、山へ写真を撮りに入るようになったのだった。

オオコノハズクがありノスリがあった。アオバズクもホシガラスもあった。兄ちゃんがスライドに作ったものを、時折、二階の部屋の白壁に映してくれるのを見ているうちに、さなえも、鳥が好きになつてしまった。飛び立つときの身構え、飛んでいるときの身ごなし、

飛び降りるときの姿——そのどれもがやさしく強い美しさにあふれていた。兄ちゃんに言わせれば、「めったに撮れない」カワセミの後ろ姿の大幅しななは、大きな宝石のように美しく、さなえは何度見ても見飽きることはなかった。

さなえは、自分もそんな写真を撮ろうとは思わなかった。ただ、そんなすてきな写真を撮る兄ちゃんと一緒にいて、そんな写真を撮る手伝いがしたかっただけなのだ。

——木に登ってさ、ブラインドはつてさ、その中に何日もたてこもるなんて、さなえには、できっこないよ。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

——夜中にタヌキなんか、不意に駆け出してきたら、心臓が止まるくらいびっくりするぞ。さなえなら、きつと、止まるもんな。

とか、

——たちの悪いハンターに鳥と間違えられて、木にいたところを撃たれたりするんだぜ。よせよせ。

とか、人のことを一人前に扱ってくれないのだから、さなえは、おかんむりなのだ。そんなとき、さなえはいつも、小さいときの出来事を思い出し、もつと悔しくなるのだった。それは、さなえが初めて海へ連れていってもらったときのこと、初めてヒトデを見つけたさなえが、

——あ、お星様の影が落ちてる！

と叫んだのを、兄ちゃんに大笑いされ、何度も繰り返して笑い話の種にされたことだ。

（兄ちゃんたら、いつまでたってもさなえのことを一人前に扱ってくれないんだから……）

そんなある日、兄ちゃんは、何を思ったものか、さなえにおみやげをもつて帰ってくれた。小さなフクロウのヒナで、それはまるで、あの不思議な毛玉ケサランパサランみたいに、頼りなくふわふわしたものだ。さなえの手のひらにも十分収まるくらい小さく、それでも目もくちばしも羽根も一人前にちゃんとそろっていて、さなえのことをまっすぐ見つめるのだった。ヒノキ林で拾った、親鳥の巣を探したが、どうしても見つからなかった、独り立ちできるまで、めんどろをみてやろうと考えて帰ってきた、そいつをさなえに任せたいのだけど、できるかい？——というわけだった。

さなえはこおどろした。兄ちゃんのことを嫌いになりそうだったことなど、いつぱんに忘れてしまった。

——ちゃんと育てて、また森へ返せるくらいにしてくれたら、そのときは、さなえを「助手」として、山へ連れてってあげる……。

兄ちゃんはそう言ってくれ、さなえはうれしくて、るるるとキジバトみたいなのを鳴らして喜んだ。

（今江祥智「あたたかなパンのにおい」）



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

二か月、三か月とすぎた。まだ、兵太郎君は学校へ姿をみせない。そのあいだ久助君は兵太郎君についてほとんど何もきかなかつた。ただ一度こういうことがあった。ある朝久助君が教室に入ってくると、ちようどいきちがい、ふたりの級友が机を一つ廊下へさげ出していた。「だれのだい。」と何げなくきくと、ひとり「兵タンのだよ。」と答えた。それだけであつた。それからこういうことがもう一度あつた。薬屋の音次郎君が、ある午後裏門の外で久助君を待っていて、いまから兵タンのところへ薬を持っていくからいっしょにいこうとさそつた。久助君はびつくりしたが同意して出かけた。薬はアスピリンというよく熱をとる薬だそうである。兵太郎君はかぜをひいたのがもとだから、このアスピリンで熱をとればすぐなおつてしまふと、音次郎君は医者のように自信をもつていった。ほんとにそうだと知らないくせに久助君も思つた。それにしても、それほどよくきく薬ならなせもつと早く持つていつてやらなかつたのだらう。やがていつもは通らない村はずれの常念寺のまえにきた。常念寺の土堀の西南のすみに小さな家が土堀によりかかるように（じじつ、すこし傾いている。）たつてゐる。それが兵太郎君の家である。ふたりは土堀にそつて歩いていった。兵太郎君の家のまえにきた。入口が歩いていて中は暗い。人がいるのかいないのかコトリとも音がしない。陽のあたる闕の上で猫が前肢をなめているばかりだ。ふたりの足はとまらなかつた。むしろ足ははやくなつた。そして通りすぎてしまひ、それきりだつたのである。

久助君はほかの友だちと笑つたり話したりするのがきらいになつた。そして、ひとりではんやりしていることが多かつた。それからひどくわすれっぽくなつた。何かしかけてわすれてしまうようなことが多かつた。いま手に持つていた本が、ふと気づくともう手になかつた。どこにおいたか、いくら頭をしぼつても思ひだせないというふうであつた。お使いにいつて、買うものをわすれてしまひ、あてずっぽうに買つて帰つて、まるでラジオできく落語みたいだと笑われたこともあつた。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

もどから久助くんは、どうかするとみなれた風景や人びとの姿が、ひどく殺風景にあじきなくみえ、そういうもののなかにあつて、自分の魂が、ちようど茨のなかにつつこんだ手のようにいためられるのを感じることがあつたが、このころはいつそうそれが多く、いつそうひどくなつた。こんなつまらない、いやなところに、なぜ人間はうまれて、生きなければならぬのかと思つて、ぼんやり庭の外をながめていることがあつた。また、冷たい水にわずか五分ばかりはいつてただけで、病氣にかかり死なねばならぬ（久助君には兵太郎君が死ぬとしか思えなかつた。）人間というものが、いつそうみじめな、つまらないものに思えるのであつた。

三学期の終わり頃、ついに兵太郎君が死んだということを久助君は耳にした。弁当のあと久助君は教壇のわきでひなたぼっこをしてゐた。すると、向こうのすみで話し合つてゐた一団の中から、「兵タンが死んだげなぞ。」とひとりがいつた。

「ほうけ。」

ほかの者がいつた。べつだんおどろくふうもみえなかつた。久助君もおどろかなかつた。久助君の心は、おどろくには、くたびれすぎたのだ。

「うらのわら小屋で死んだまねをしとつたら、ほんとに死んじやつたげな。」

とはじめのひとりがいつと、他の者たちは明るく笑つて、兵太郎君の死んだまねや腹痛のまねのうまかつたことをひとしきり話し合つた。

久助君はもうきいていなかった。ああ、どうどうそうなつてしまつたのかと思つた。そつと片手を床の上の陽なたにはわせてみると、自分の手はかさかさして、くたびれていて、悲しげに、みにくくみえた。

日暮だつた。

（新美南吉「川」）

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34



久助君の身体のなかに漠然とした悲しみがただよっていた。

昼のなごりの光と、夜のさきぶれの闇とが、地上でうまくとけあわないような、妙にちぐはぐな感じのひとときであった。

久助君の魂は、長い悲しみの連鎖のつづきをくたびはてながら、旅人のようにたどっていた。

六月の日暮の、微妙な、そして豊富な物音が、戸外にみちていた。それでいて静かだった。

久助君は目を開いて、柱にもたれていた。何かよいことがあるような気がした。いやいやまだ悲しみはつづくのだという気もした。

すると遠いざわめきのなかに、一こえ仔山羊のなき声がまじったのをききとめた。久助君はしまったと思った。生まれてからまだ二十

日ばかりの仔山羊を、ひるま川上へつれていって、昆虫を追っかけているうちついわすれてきてしまったのだ。しまった。それと同時に、

仔山羊はひとりで帰ってきたのだと確信をもつて思った。

久助君は山羊小屋の横へかけ出していった。川上の方をみた。

仔山羊は向こうからやつてくる。

久助君にはほかのものは何も眼にはいらなかった。仔山羊の白いかれんな姿だけが、——仔山羊と自分の地点をつなぐ距離だけがみえた。

仔山羊は立ちどまっては川縁の草をすこし喰み、またすこし走っては立ちどまり、無心に遊びながらやつてくる。

久助君はむかえにいいこうとは思わなかった。もうたしかにここま

でくるのだ。

仔山羊は電車道もこえてきたのだ。電車にもひかれずに。あの土手のこわれたところもうまくわたったのだ。よく川に落ちもせず

に。久助君は胸が熱くなり、なみだが眼にあふれ、ぽとぽと落ちた。

仔山羊はひとりで帰ってきたのだ。

久助君の胸に、今年になってからはじめての春がやつてきたよ

うな気がした。

久助君はもう、兵太郎君が死んではない、きつと帰ってくる、という確信を持っていたので、あまりおどろかなかった。

教室にはいると、そこに——いつも兵太郎君のいたところに、洋服に着かえた兵太郎君が白くなった顔でにこにこしながら腰かけていた。

久助君は自分の席へついてランドセルをおろすと、眼を大きく開いたまま、兵太郎君をみてつつ立っていた。そうすると自然に顔がくずれて、兵太郎君といっしょに笑い出した。

兵太郎君は海峡の向こうの親戚の家にもらわれていったのだが、どうしてもそこがいやで帰ってきたのだそうである。それだけ久助君は人からきいた。川のことでもとで病気をしたのかしなかったのかはわからなかった。だがもうそんなことはどうでもよかった。兵太郎君は帰ってきたのだ。

休憩時間に兵太郎君が運動場へはだしでとび出していくのを窓からみたとき、久助君は、しみじみこの世はなつかしいと思った。そしてめったなことでは死なない人間の生命というものが、ほんとうに尊く、美しく思われた。

(新美南吉「川」)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

さわやかな男として、私の頭に真つ先に浮かんだのは、若田光一さんである。スペースシャトル・エンデバーに搭乗し、ロボット・アームで衛星をみごと回収した人だ。

若田さんの何がそんなに魅力かという点、一にも二にも表情だ。私の目にした限りでは、宇宙について語る彼は、常に笑顔であつた。宇宙に関する仕事に携わっていることそのものが、心から嬉しいように。

「自分は幸運な人間です」と彼は語っている。子どもの頃、アポロの月着陸を見て以来、あこがれはあったが、米ソの人しか機会はないと思っていた、と。同じ空の仕事として、航空会社に入社、やがて新聞で宇宙飛行士の募集を知る。

九日間の旅を終え、地球に帰り着いたとき、エンデバーの機体を右手でそつととおしむようになっていた。その姿を見て私は、（この男は、人生を愛せる男だ）

と感じた。日本人初の搭乗運用技術者となった名誉や、衛星回収の成功ゆえではない。「幸運な人間」と自らも言っているように、それらは後からついてきた結果であつて、彼としては、夢に向かって生きているそのことが、喜びなのではないだろうか。あの表情は、内面が満ち足りた人だけに、できるもののように思うのだ。

そこで思い出すのは、イギリスの探検家スコットである。若田さんを「成功者」とするなら、こちらはまぎれもない「失敗者」だ。南極点到達競争に敗れ、引き返す途中、遭難、帰らぬ人となった。

死ぬまでの間に彼は、たくさんの手紙や日記を書き残している。凍傷に蝕まれ、食料や燃料が尽きていく中で、「この遠征を後悔してはおりません」「すべて承知のうえ、覚悟のうえでの冒険だったのです。結果は裏目に出ましたが、私たちが文句を言う筋合いではありません」「家にいて、安樂すぎる生活を送るよりはるかに有意義でした」「最期も近くなりましたが、私たちは今まで、そしてこれからも朗らかさを失わないでしょう」

死に臨んでも、すがすがしいとさえいえる態度を貫いた。それ

は、氷雪に果てる結果になりはしても、その生き方が誰に強いられるでもない、自分の価値観に基づき、自分で決めたものだったからだ。だからこそ、結果もすべて引き受けることができた。「自己決定、自己責任」という、生きる上での大原則が、冒険者たちによつて、もつともわかりやすく表現されているといえる。

むろん、多くの人は南極へも宇宙へも行かない。家庭と会社の行ったり来たりの中に人生の大半を過ごすだろう。が、そのなかでも「自分がかくあることを人のせいにはしない生き方」を、彼から学べるのではないか。

（岸本葉子「夢に向かって生きる喜び」）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

日本人は働きすぎだとよくいわれます。どうやら平均的な日本人は、そもそも働くことが好きなのだ、としかいいようがなさそうです。いいかえれば、働くこと以外の楽しみを知らないのが日本人ということなのでしょう。

「生産性」という言葉があります。その定義はさまざまなのですが、雇用者一人あたりの付加価値（売上げマイナス原材料費）で生産性をはかることにすれば、イギリスの生産性は日本のそれよりも圧倒的に低いものと予想されます。また、イギリスの工場をつくった製品よりも、日本の工場をつくった製品のほうが、品質がすぐれており、しかもムラのないことが予想されます。こうした予想はたしかに当たっています。しかし、だからといってイギリス人の生活ぶりがよくないとか、イギリス人はもつと働くべきだ、ということにはなりません。働く時間を最小限にとどめておいて、働くこと以外の「生活」をエンジョイするというのも、長い歴史をへたうえで、イギリス人がたどりついたひとつの「選択」なのです。

逆に、日本人のように働くことが生きがいだと考えるのも、ひとつの「選択」であることに変わりはありません。大切なことは、選択肢がほかにいくつもありうることを、君たちがちゃんと心得ておくことです。働きバチになることが日本人の宿命だ、などと考えてもらっては困るのです。君たちのお父さんやお祖父さんの「選択」にしばられる必要はまったくありません。多様な選択肢のありうることを知ったうえで、君たちの一人一人が、自分の価値観にてらして自分の生活の仕方を「選択」すること、すなわち「選択の自由」をもつことが必要なのです。

フランスや西ドイツでは、かなり長期間の夏休みをとるのがあたりまえとされています。三―四週間の夏休みをとって、家族や友人と連れだつて避暑地にのけて、ゆつくりとすごします。もし日本でおなじような夏の過ごし方をしようものなら、別荘の持ち主でないかぎり、途方もない大金がかかります。四人家族が三泊四日で海水浴にかけようとすれば、二十万円ぐらいの出費を覚悟しておか

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

ねばなりません。電車や飛行機の運賃、高速道路の通行料、ガソリン代、リゾート・ホテルの宿泊費、レストランでの食費、遊興施設の入場料などが、諸外国にくらべて日本では、格段に高いのです。日本でフランス人なみの夏の過ごし方をしようとすれば、いくら節約しても、締めて百万円ぐらいはかかるでしょう。たかが避暑のために、こんな多額の出費をする人はまずいないと考えてよいでしょう。しかも三週間の夏休みをとれば、夏休みをとらない場合に得ていたはずの収入を犠牲にしなければなりません。このことをむずかしくいえば、それだけの「機会費用」を支払わなければなりません。たとえば、日給一万円のタクシートの運転手さんが三週間も仕事を休めば、二十一万円の機会費用を支払ったことになります。その分までふくめて考えると、三週間の夏休みを避暑地ですぐすのに要する費用はもつと高くなります。

ですから、多くの日本人にとって、夏のお盆の時期に、猛暑の中、渋滞する高速道路を運転していなかに帰って、親せき縁者との再会を楽しむのが、精一杯の夏休みなのです。いなかに帰れば、宿泊費はタダのはずですし、四人家族が自家用車で帰省すれば、JRで帰省するよりも、費用はぐんと安上がりになります。お盆には会社が休みになりますから、機会費用も支払わなくてすみます。フランスでは、夏の二ヶ月間が、事実上のお盆なのです。パリの街は、夏場、お盆の東京なみに閑散とします。子どもの夏休みも、日本よりは一ヶ月以上も長いはずですよ。

日本人がなぜ働きすぎるのかを説明する理由のひとつとして、余暇をすごすためのコストが、日本では異常に高いことをあげておかねばなりません。もうひとつの理由は、日本の学校制度が子どもたちに過酷な課外学習を強いることです。

（佐和隆光「豊かさのゆくえ」）



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

ギフチヨウの幼虫は、アンアオイとよばれる非常にかわった植物の葉を食べて育つ。早春にあらわれたギフチヨウは、やがて交尾し、雌はカンアオイの葉のうらに、真珠のような光沢のある卵を、数個から数十個かためて産みつける。——中略——

毛虫はカンアオイの葉をむさぼり食い、六月のはじめにはサナギになる。六月いっぱい、サナギはまわりの温度とは関係なく、ひたすら休眠する。そして七月になると、なぜだかまったくわからないが休眠からさめる。

けれど、そのころから始まる夏の暑さが、サナギからチヨウへの変化をおさえる。チヨウへの歩みが始まるのは、野山に涼風のたつ十月である。

けれど、ふたたびそこで、今度はたちまちにして訪れる秋の夜の寒さが、チヨウへの歩みをにぶらせる。チヨウの姿がでかあがるのは、その年の末、十二月ごろである。

木枯らしの吹くこの寒さのなかで、やっとできあがった春の女神は、かたいサナギのからのなかでじつと冬の寒さに耐えつづける。

長かった冬も終わりに近づき、寒さがゆるんできると、女神の衣はいよいよ最後の仕上げにかかる。それとともに囚われの身の女神は、サナギのからをとくす液体を分泌しはじめる。こうしてまもなくサナギのからは割れ、いよいよ女神が、自由の姿をあらわす。

温度に対する反応にもとづいて組まれたこのカレンダーが、ギフチヨウの一年をきめていく。そしてギフチヨウは、毎年早春のある一定の時期に、春の女神として舞いであるのである。

「ほかのチヨウでも、基本的には同じことだ。いずれも冬の間は、じつと寒さに耐えて眠っている。そしてじつは、この一定期間寒さを過ごすということが、春を迎えるために積極的に必要なのである。秋の終わりから寒さにあわせず、ヌクヌクと暖めてやった過保護サナギは、ついにチヨウになることなく死んでしまう。つまりチヨウたちは、冬の寒さを受身的に耐えているのではない。彼ら

はきびしい寒さを要求しているのである。暖冬の年の春、チヨウたちの姿は例年よりも減ることが多い。

チヨウの美しさは、その大部分を鱗粉に負うている。鱗粉はしかし、単に翅の表面にばらまかれた粉ではない。それはこまかな毛の変化したもので、翅の表面に一枚ずつしつかり生えている。

チヨウは文句なしに美しい。しかしほかの多くの動物と同様に、より美しいのは雄のほうである。雌は色もようもずっと地味で、よく装飾品に作られるあの青く光る美しいモルフオチヨウも、雌は褐色でおよそ冴えない色をしている。

けれど、その美しい雄はひたすら雌の翅の色に魅かれる。つまり、チヨウの雄は、雌の翅の色を目印にして、雌をみつけ、急いで飛んでいつて、思いをとげるのである。

このとき、雌のチヨウの翅の色は、まさに目じるしなのであってそれ以上の何物でもない。ただの紙切れに色をぬって、適当な場所においてやれば、雄はおろかにもそれに飛んでくる。紙の形などは極端にいえばどうでもよい。四角でも三角でもかまわないのだ。

アゲハチヨウは雄も雌も黒と黄の縞もようをもっているが、雄はこの黒と黄の縞もように魅きつけられる。黒い長方形のボール紙に、翅の黄色い部分をいくつか貼りつけた「モデル」を作り、アゲハの雄が雌を探して飛びまわっているところに出してやると、雄はほんものの雌に対するのと同じ真剣さでこの紙モデルに飛びついてくる。

もつと驚いたことに、この縞は黒と黄でなくともよい。黒と緑の縞でも一向にかまわないのである。とはいえ、黒と青ではさすがにだめだし、黒と赤でもいけない。そして黒と黄の場合でも、特定の黄色でなければ、雄はそれを雌の目じるしだとは思わない。

（日高敏隆「生きものの世界への疑問」）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

イヌが喜びを表現するとき尾を振ることはよく知られている。イヌの喜びが大きいときには、尾を激しく振り、体をくねらせる。耳は後方に絞られるような形で伏せている。いてもたってもいられぬように跳びはねることもある。生後半年前後の若い雌では、嬉しすぎて尿をもらす場合もある。

このような喜びを表すのは、たとえば、長い間、旅に出ていたご主人が帰ってきたようなときである。イヌは家族をひとつの群れとして考えているが、群にはひとりひとりに順位の格付けがある。当然、順位の上的の人に会えたときのほうが喜びの表現も激しくなる。人に対して喜んでいるときイヌは、年齢が若いほど人の顔を舐めたがるものである。

犬種によつて喜びの表現に差があり、一般に日本犬は洋犬ほどオーバーではない。洋犬でも小型の愛玩犬種と、シェパード、シベリアン・ハスキーなど使役犬種との比較では、飼主と居住区を同じにしている愛玩犬種のほうが喜びの表現は大きい。

イヌには人と共同作業をしてほめられたときも嬉しくなる習性がある。たとえば、ボールを投げての「持って来い」の訓練をさせる時、イヌは嬉々として投げたボールをくわえてきて飼主に渡すが、このときのボディランゲージは、「大喜び」とはやや違う。「上機嫌」あるいは「親愛」である。ボールを渡した後、「よし、よくやった」という賞賛の言葉で嬉しくなっている。尾は激しくは振らず、ゆつくりと振って、耳は後ろに伏せている。ボールを主人に渡した後、脚側に坐つて待つ訓練までよくできているイヌは、首を伸ばして主人がもう一度ボールを投げるのを待つ。ときには「わん、わん」と催促することがある。

また、イヌは叱られた後、許しを乞うために「甘え」のボディランゲージを見せるが、そのときの尾の位置は催促のときとは違つ

て、下に向けている。つまり、恐縮を表現しながら、遊びに誘い、なんとか御主人に機嫌をなおしてもらいたいという魂胆である。

ただし、イヌがこういう様子を見せたからといって、叱られた理由を理解して二度と同じことをしないかといえそうではない。叱られて懲りたときは、まず恐怖を覚えるものである。恐怖を覚えたときのイヌは、尾を完全に股間にまるめ込み、耳を後方に伏せてうずくまってしまう。まるめられた尾は振られることはない。叱られても「甘え」を見せるイヌには、叱られた意味が分かつていないものである。

イヌが知らないイヌに出あつて、尾を上にあげて小刻みに振るときは、相手に警戒心を持ったときである。同時に攻撃すべきか否かの迷いがある。耳は前方に向けてしっかりと立てられている。垂れ耳のハウンド種でも、耳の付け根が前向きになるので、警戒心と攻撃的な気持ちを抱いたことが判断できる。

この場合、尾を高い位置で振るイヌほど気性が強い上位のイヌである。イヌが相手に威圧感を覚えれば尾を下げながら振り、耳は後方に向けて伏せていく。

したがつて、イヌが尾を振っているから喧嘩にはならないだろうと思つたら大間違いである。威圧されたイヌが怯えながらも敵意を表して牙を見せたりすると、尾を振っていたほうがいきなり攻撃をしかける場合もある。とくにテリア・グループは反応が早いので注意する必要がある。

(沼田陽一「イヌはなぜ人間になつたのか」)



私たちは、生活の場が森林から離れてしまっているので、森林が破壊されると毎日の生活をいかに変え、いかに住民を苦しめているかを理解するのはむずかしいでしょう。多くの国でその森林のなくなっただことが、エネルギー危機となつて現われています。といっても、先進国の石油危機ではなく、まきや炭の不足です。

国連の調査によると、世界人口の半数がエネルギーをまきや炭に頼っています。世界で切られる木材の半分は、燃料にされています。ところが、村の周辺の木を切りつくして遠くまでまき集めに出かけねばならず、アジア諸国や、アフリカの乾燥地帯では、まき集めはふつう、週三回も一日がかりで出かける重労働になっています。

同じ調査によると、世界で約十一億五〇〇〇万人がまきや炭の不足に悩まされています。紀元二〇〇〇年には、これが二四億人にも増加すると予測しています。まきが手にはいらなくなった人びとは、家畜のフンを乾燥させて燃料に使います。肥料として畑に戻すべきフンを燃やすので、いよいよ田畑は荒れてしまっています。

森林がこれだけ急激に広い範囲で減ってしまうと、気象が変わってしまふのでは、と心配されています。アマゾンでの調査によると、熱帯雨林では降った雨の四分の三までが樹木に吸収され、残り四分の一がジャングル内の川に流れこみます。樹木に吸収された水分は、また蒸発して雨となつて降ってきます。森林と大気との間で、水の「キャッチボール」をしているようなものです。このような気候では、森林の破壊でキャッチャーがいなくなると、雨が大幅に減って気候がいつぱんに乾燥化してしまいます。

樹木は切られると、三重の意味で二酸化炭素を増やすことにつながります。それは1. 二酸化炭素を吸収するものが少なくなる、2. 切られた木は、木材になつても紙になつても、いずれ燃やされるか、くさつて二酸化炭素を出し、3. 森林の土の中にたまつてい

た落ち葉や根がくさつて、二酸化炭素の発生源になるということです。

大気中の二酸化炭素は、ちようど温室のガラスのように、太陽光線は自由に通りぬけてきても、熱は逃がさないはたらきがあります。つまり、二酸化炭素が増えると、地球全体をガラスでおおつたようになつてしまうのです。

また、森林を破壊すると、そこに生きる動植物にも致命的な影響をあたえます。地球上には五〇〇万から一〇〇〇万種の動植物がいると考えられています。このうち名前のついているのは一六〇万種ほどです。これらの生き物の半分は熱帯林で生きています。熱帯林が破壊されれば、これらの生物も絶滅してしまいます。

熱帯林に住む原住民もその破壊とともに急速に追いつめられています。アマゾンのインディオ、アフリカのピグミーやブッシュマン、東南アジアのメオ族などは、森林地帯に住んで伝統的な生活や文化を維持してきました。森林の破壊とともに、彼らはすみかを奪われて都市に流れ込んでスラムに住まねばならなくなったり、あるいは、奴隷のように農園で使われて生きています。

人類は、これからますます森林を奪っていくことになるのでしよう。国連の推定では一〇ヘクタール森林が破壊されてわずか一ヘクタールしか植林がすすんでいません。木を植えて利用できるまでには最低でも一〇年はかかります。今ある木を一本でも多く守り、一本でも増やすのが私たちのもっとも重要な義務です。そうでないと、私たちの子孫はこの地球に生きていけなくなるかもしれません。

(石弘之「いま地球がたいへんだ」)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

「ごみゼロ社会」は企業が行動を改めさえすれば実現するかのよう
に受け取られるかもしれませんが。しかし、そう単純ではありません。

私たち一人ひとりはこの社会の中でいろいろな顔をもっており、
どの顔もひとりの人間の真の姿です。政治的な顔は、国民・市民と
しての立場から主権者として政治にかかわることです。生産者として
の顔は、職業・仕事をとおして経済活動にかかわることです。生活
者としての顔は、ものやサービスを消費しながら、教育・文化や
趣味・リクリエーションにかかわり成長していくことです。こうした
いろいろな側面が私たちのなかに重なりあっています。人によつ
て、また年齢によつて、ある部分が大きくなったり小さくなったりし
ますが、こうした多面的な視点から対象をトータルに見ていくことが
必要です。

暖房や冷房がききすぎている乗物やオフィス、歯磨き・洗顔・調理
のときの湯水の流しっぱなしや、テレビ・電気のつけっぱなし、メー
カーからのエコロジーメッセージに気づかず、値段と見栄えと便利さ
で商品を選ぶ買い物、公共輸送機関が利用できるのに車を使うこ
と……。私たちにとつて身につまされることばかりです。いままで
あたりまえのこと、よいと思っていたこと、まわりの人も同じように
していることを、自分の意見で変えていくわけですから、なぜそうし
ようとするのかについての知識が必要ですが、日本人とか〇〇会社の
社員としてではなく、地球人としてのセンスが必要です。

ここで、ケチとぜいたくについて考えてみましょう。ケチとかぜい
たくとかいうことは、ものが少ないとき、ものがあっても買うお金が
ない時代、逆にいえば、だれもがものを持ち、お金を使うことを渴望
しているときの言葉です。ある人がどんなものを買う、お金を使う
のをみてうらやむときに「ぜいたく」といいます。しかし、地球はい
ま、もの余り・金余りの人間によつて痛めつけられているのです。オ
イルショックのとき、もの（資源）が枯渇するとい

われましたが、そうかんたんにはなくなることがわかってしまし
た。地球にはまだものがいっぱいあります。お金も先進国には十分あ
ります。とくに日本は余っています。

地球、とくに先進国ではいま、ものが余っています。つまり、ケチ
とぜいたくという言葉の社会的基盤がなくなってきました。そうい
うときに、この言葉のもつ概念にしばらくいられた人は時代遅れとい
うことになります。いま地球に不足しているのは、ものではなく、もの
の入れもの、資源を使いごみにしたときのごみの捨て場（地球
環境）です。先進国、とくに日本に不足しているのは、お金ではな
くて地球を救うための知識とセンスです。

ものをどんどんつくり、使い捨てにする一方で、なんでもお金で
解決しようとする日本人は、自らのことを日本語で「ぜいたく」と
称しても、それは本人の勝手ですが、じつは地球語に翻訳するとそれ
は「ケチ」ということになってきます。ものを大切にし、できるだけ
ごみをつくらないようにする人、そうなるように智恵を出す人、汗を
流す人が、地球語では「ぜいたく」な人なのです。

地球環境を大切に守りながら子孫に伝えていくことに異存のある
人はいないでしょう。問題は自分自身でそれを理解し行動していくこ
とです。あなたがいま、この本を読んでいるその瞬間にも、たえず
まわりに捨てつづけている「ごみ」をとおして、生活を見つめ直して
いくことが大切です。そのときのキーワードは、地球語の「ぜいた
く」なのです。

（八太昭道「ごみから地球を考える」）



時計をみると、塾のはじまる時刻まで、まだ一時間半ほどあった。ゆたかは、道路脇の小さな公園を歩いた。公園の中に人影はなかった。ベンチに腰をおろしたとき、キー、キーと鳴く声が耳につき、目をやった方に、小さな段ボール箱がおかれていた。段ボール箱の中をのぞくと、やっと歩けるようになった子猫が二ひき、箱の中を動きまわっていた。

その段ボール箱には「ほけんじよへつれていってころされます。だれかひろってください」と、おさない文字で書かれていた。その字から、小学校の低学年の子供が書いたのだと分かり、ゆたかは、このままだと、保健所につれていかれて殺されてしまうだろう子猫たちを、小さな子が、助けようとして捨てたのだと思った。助けたいと思った。そう思ったとき、お父さんが動物ぎらいなのを思い出した。ゆたかは、赤毛の子猫を手にとってみた。子猫はゆたかの手に小さな爪を立ててキー、キーとはげしく鳴いた。ぱっちり開いた目もかわいかった。

赤毛の子猫を置いて、白ぶちの子猫を手のにせてみた。白ぶちは、手にしがみつくように爪をたて、こきざみに震えながら、何かをうったえかけるように鳴いた。その見開いた目が、たまらないほどかわいかった。つれて帰りたいという思いがふくらむにつれ、ゆたかの中で、お父さんの顔が大きくなった。だれかがひろってくれるだろうと、お父さんがおき、ひろわれなければ死んでしまうだろうという思いとせめぎあっていた。それは、お父さんと、目の前で助けを求めている子猫たちの顔をしてゆたかを苦しめた。

「だれかが助けてくれるさ」
お父さんの顔に、押しつぶされそうないで、子猫たちに話しかけたとき、胸が痛んだ。目に浮かびかけた涙をこらえて立ちあがったとき、カラスが一羽、子猫たちの真上の木の枝にとまった。カラスの目が子猫たちを狙っていた。ゆたかは、小石をひろって、カラスに投げつけた。木の枝に小石がぶつかる音といっしょに、カラスが飛び立ち、そのまま、公園のすみっこに降り立った。
ゆたかは、そのカラスめがけて、また石を投げつけた。何度も、

何度も石を投げつけた。石を投げるたびに、カラスは逃げるが、公園から去ろうとはしなかった。

「このままにしたら、あいつに食べられる……」

そんな思いがよぎったとき、ゆたかは、何も考えず、子猫たちの入った箱をかえ上げた。そして、まつわりついてくるお父さんの顔を、押しのけるように、家路をたどった。

人通りがまばらになった暗い通りに、ひとかたまりの子供らがあふれだし、それぞれの家路へと散らばっていった。最後に教室をでたゆたかは、そのようすを見ながら、塾の階段を降りた。

早く帰りたいという思いがあり、足のすくむような思いもあった。納屋にかくした子猫のことが気になり、見つかつているだろうという不安が、お父さんの顔といっしょになって、急ごうとする気持ちにからみついてくる。あんなところにかくしていても、鳴き声を上げれば、だれだつて気がつく。ずっと静かにしていてもさえくれば……。

大きな通りにでたとき、車の流れる音が急に大きくなった。夜の大通りは、まるで光の洪水のようだった。信号が変わり、光の洪水がせき止められた。いく人かの歩行者が、横断歩道の上ですれ違った。横断歩道を渡って、しばらく歩いてから、車の洪水のはじまった音が背中にひびいた。

ゆたかは、子猫が見つけれられていたときの方策を、あれこれ考えながら歩いた。飼ってくれと言っても、それはむりだと分かっていた。引き受けてくれそうな友だちの顔をいろいろ浮かべ、もらってくれる人があらわれるまで、飼っていてほしいとたのむことしか残されていないような気がした。そう思って浮かべる友だちや、同級生の女の子の顔が、なぜか、いつもより、とつきづらくよそよそしかった。家が近づくにつれ、めぐらせる思いの何もかもが重たくなり、足も重たくなった。玄関の前までもどつてきたときには、ただ、見つからないかもしれないということだけが、気持ちのささえたつた。

(笹山久三「ゆたかは鳥になりたかった」)



「ただいま」
「ゆたか、ちよつときなさい」

お帰りの返事もなく、呼びつけたお父さんの声は、いつもより強かった。

「お前か、猫をひろつてきたのは」

居間にはいるなり、耳につきつけられた言葉に足がすくんだ。

「カラスが狙っていたから……。食べられちゃうから……」

「今から、もどしてきなさい。元のところへ……」

「……」
いやだと思った。それでも口にはだせなかった。

「お父さんは、猫の毛アレルギーなの。子供のころ、ぜんそくをわずらったことがあるの、それ、猫の毛が原因かもしれないんだって」

「友だちで、飼ってくれる人さがすから……」
「いなかったらどうするの」

そう言った、お母さんの脇で、お父さんがこつちを見ていた。にらまれているようで、目をあげられなかった。

「それまで、納屋で飼うから、自分で生きていかれるようになったら、のら猫にするから」

「聞き分けのないやつだなあ、のら猫を増やしてどうするんだ。のら猫のせいで迷惑こうむっている人間のことは、どうなるんだ」

「……」

「とにかく、うちじゃ飼えないから、元のところにもどしてきなさい。お前が悪いんじゃない、最初にすてた人間が悪いんだ。うちで育てて、のら猫を増やしたら、うちが悪者にされる。分かるな……」

「……」

もう口ごたえはできなかった。

「今からいつてきなさい」

「だれか、猫の好きな人がひろつてくれるかもしれないでしょ」
そう付け加えたお母さんの言葉は、声だけやさしかった。ゆたかは、言葉をうしなつたままに立ち上がった。

「待ちなさい。これミルクとお皿。ひろつてくれる人があらわれるまでに、死んじやうと困るから……」

お母さんが差しだした、牛乳パックとプラスチックの皿を受け取り、ゆたかは納屋に歩いた。歩きながら、こうなることは、初めから分かつていたような気がした。

納屋に入ると、その気配を感じたのか、子猫たちが鳴きだした。

納屋の電灯をつけると、けんめいに伸び上がって、愛を求める子猫たちの姿があつた。たつた二つの、こんな小さな命でさえ、まもつてやることのできない自分のことが、みじめでならなかった。大きく

なつて、自分で働きだしたら、ぜつたい、お父さんの言うことも、お母さんの言うことも聞かない。そう思いながら、子猫の入った箱にふたをした。子猫たちが、キーキー鳴きながら、助けてよと、うったえかけるように箱の中を動きまわつた。

公園から見える入り江に街灯の光がゆれている。古本屋のおじいさんの家に、明かりの気配はなく、廃屋が、自分のしでかした罪のきずあとのようににたざんでいた。

ゆたかは、指にミルクをつけて子猫たちの口にもつていき、立ち去れない思いのままに時間を過ごしていた。子猫は、ミルクのついた指にしゃぶりついて、けんめいに吸い込もうとする。そのざらついた舌の感触が、指先に心地よい。

（中略）

生きようとしている子猫たちを見つめているうちに、ゆたかは、どうしても助けてやりたくなつた。ここに放っておけば、明日の朝にはカラスがくるだろうと思つた。頭の中では、子猫たちをかくしておける安全な場所をさがしまわっていた。自分の家で、見つからない場所は、もうなかった。あそこ、このことを思いをどんなにめぐらせても、人の目のないところは思い当たらなかった。

（笹山久三「ゆたかは鳥になりたかつた」）

（笹山久三「ゆたかは鳥になりたかつた」）



読解問題 7月4週分

問1 読解マラソン集1番「窓際の席で」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 恭一は、どうして久子が何度もトイレに行くのかよくわからなかった。
B 恭一は、去年は一人で新幹線に乗った
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集1番「窓際の席で」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 恭一が久子に「眠ってもいいぞ」と言ったのは、眠っていればトイレに行かないと思ったからである
B 恭一の話した太ったおばさんのいびきの話は久子を喜ばせるための作り話だった
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集2番「兄ちゃんが初めて」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A さなえは、兄ちゃんの作ったスライドを見るうちに鳥が好きになった
B さなえは、兄ちゃんの写真撮影の助手のようなことをしたかった
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集2番「兄ちゃんが初めて」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 兄ちゃんは、さなえを一人前だと思っていた
B 兄ちゃんは、さなえのために、フクロウの巣からヒナを持って帰ってきた
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集3番「二か月、三か月と」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 兵太郎君は、アスピリンという薬を持って行ってあげたが治らなかった
B 久助君は、生まれつきひどくわすれっぽかった
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集3番「二か月、三か月と」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 久助君は、アスピリンという薬は効かないだろうと思っていた
B 久助君は、お使いにいて、買うものをわすれてしまうと、いつもそのまま帰ってきた
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集4番「久助君の身体の中に」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 久助君は、仔山羊を忘れてきたことに気づき、川上までむかえに行った
B 仔山羊は、無心に遊びながら川を泳いで帰ってきた
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集4番「久助君の身体の中に」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 兵太郎君は、休む前にいた席と同じ場所にすわっていた
B 兵太郎君が病気をしていたかどうかを、久助君は聞かなかった
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 8月4週分

問1 読解マラソン集5番「さわやかな男として」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 若田さんは、夢に向かって生きていることそのものが喜びだった
B 若田さんは、アポロの月着陸を見て以来、日本人初の宇宙飛行士になることを目指していた
- 1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集5番「さわやかな男として」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A スコットは、南極点到達競争に敗れたが、そのことを後悔しなかった
B 私たちは、スコットから、すべての結果を引き受ける生き方を学ぶことができる
- 1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集6番「日本人は働きすぎだ」と読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 日本の方がイギリスよりも、生産性が高く、品質が優れているようだ
B 日本人も、イギリス人のように生活をエンジョイする生き方を選択するとよい
- 1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集6番「日本人は働きすぎだ」と読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A フランスや西ドイツは、日本よりも豊かなので、長期間の夏休みがとれる
B 日本では、余暇を過ごすための費用がかかる
- 1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集7番「ギフチョウの幼虫は」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 冬の寒さが厳しすぎると、成虫になるチョウは例年よりも少なくなる
B チョウの美しさは、鱗粉とよばれる、翅の表面にばらまかれた粉によるものだ
- 1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集7番「ギフチョウの幼虫は」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 雄のチョウは、翅の色と形を目印にして雌を見つける
B 雄に見つけてもらうために、雌のチョウの翅の色は、雄よりも美しいことが多い
- 1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集8番「イヌが喜びを」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A イヌは、自分よりも上の順位のものに対するほど甘えが激しい
B 一般に大型犬の方が、小型犬に比べて喜びの表現が大きい
- 1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集8番「イヌが喜びを」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 叱られていても甘えを見せるときは、叱られた意味がわかっていない
B イヌが尾を振るのは、うれしいときだけである
- 1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 9月4週分

問1 ^{どっかい}読解マラソン集9番「^{わたし}私たちは、生活の場が」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
- A 世界人口の大部分が、エネルギーを石油に頼^{たよ}っている
- B 森林と大気の間で水のキャッチボールができなくなると、大雨^ふが降りやすくなる
- 1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 ^{どっかい}読解マラソン集9番「^{わたし}私たちは、生活の場が」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
- A 大気中の二酸化炭素は、光を通すが熱^にを逃がさないという働きがある
- B 熱帯林に生きる生物は、熱帯林が破壊^{はかい}されると都市に出てくるようになる
- 1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 ^{どっかい}読解マラソン集10番「『ごみゼロ社会』は」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
- A ひとりの人間は、社会の中で生産者の面も生活者の面も持っている
- B 今の^{わたし}私^{ひが}たちには被害^{ひがい}がないが、何十年も先に被害^{ひがい}が出るような環^{かん}境^{きやう}問題がある
- 1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 ^{どっかい}読解マラソン集10番「『ごみゼロ社会』は」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
- A オイルショックの経験で、日本人は地球の資源が限られていることを知った
- B ものをたくさん作ってはぜいたく^{つか}に使い捨^すてにする人を、地球語では「ケチ」と言う
- 1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 ^{どっかい}読解マラソン集11番「時計をみると」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
- A 二匹^{ひき}の子猫^{こねこ}は、それぞれ色^{ちが}が違っていた
- B ゆたかは、塾^{じゅく}から帰る途^{どちゆう}中に、子猫^{こねこ}の入った箱を見つけた
- 1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 ^{どっかい}読解マラソン集11番「時計をみると」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
- A お父さんは、犬は好きだが猫^{ねこ}は嫌^{きら}いだった
- B ゆたかは、塾^{じゅく}が終わると急いで家に向かった
- 1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 ^{どっかい}読解マラソン集12番「『ただいま』」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
- A お父さんは、子猫^{こねこ}のためにミルクとお皿^{わた}を渡してくれた
- B ゆたかは、大きくなったらお父さんやお母さんの言うことを聞くまいと思った
- 1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 ^{どっかい}読解マラソン集12番「『ただいま』」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
- A ゆたかは、子猫^{こねこ}を置くと、急いで家に向かった
- B ゆたかにとって、塾^{じゅく}はわずかな息抜^{いきぬ}きの時間だった
- 1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×